

高校から競技を開始 天性のセンスで実力者に

きっかけは、中学3年生の夏に見学を訪れた鳥取県選抜チームの合同練習会だった。目の前を駆け抜けていくスピード感、その渦中で行われる緻密な駆け引き、技術と知略が勝敗を分ける奥深い競技性。初めて目にした自転車競技は、一人のスポーツ少年の心を突き動かす絶大なパワーに満ちていた。

美甘くんは岡山県真庭市^{ひるぜん}出身。中学まではサッカーに励んだが、高校からは自転車競技に打ち込むと決め、自転車競技部のある倉吉総合産業高校に進んだ。それまで競技用自転車に乗ったことすらなかったが、長年スポーツで培ってきた体力と手中心力、それに天性の駆け引きセンスをもって、ぐんぐんと実力を伸ばしていく。

初の出場大会となった1年秋の全国都道府県対抗自転車競技大会では、成人も含む男子個人ロードレース部門にて見事に完走を果たす。足切りルールもある厳しい状況下で、競技歴わずか半年の新人選手にとっては快挙ともいえる結果だった。以降、美甘くんはレースを重ねることに力をつけていき、特にゴール前でのスプリント（全力疾走）で力を発揮する選手へと成長していく。2年夏のインターハイ中国地区大会では得意のゴールスプリントでロードレース部門3位に入賞。全国大会への切符を手にした。

巻頭特集 倉吉総合産業高等学校 自転車競技部 美甘星次郎くん

チャンピオンは無限の可能性を駆ける



美甘星次郎くん

2002年9月23日生まれ。岡山県真庭市^{ひるぜん}出身。高校から自転車競技を始め、2年夏のインターハイのロードレース部門で個人優勝。トラック競技ではポイントレース部門を中心に出場。スプリンター寄りの脚質を持つも、今のところはスペシャリストに特化するつもりはなく、あらゆる可能性に挑戦していきたい考えだ。現在の愛車はPINARELLO社のDOGMA

令和元年度のインターハイにて、自転車競技ロードレース部門の総合覇者に輝いた倉吉総合産業高校の美甘星次郎くん。今春、高校を卒業して新たな舞台へと突き進んでいく。

初出場のインターハイで ロードレースを制す

本番前の試走時には「難しいコースだな」と感じた。直前のトラック競技で思うような結果が残せなかったショックもあった。心情が具現化したかのように、その日は朝から雨が降っていた。それでも年に一度のインターハイ決勝戦は待つてくれない。気持ち切り替えてペダルを踏み込み、総距離94.3kmの戦いの舞台へと身を投じた。

スタート直後から雨の勢いは増していく。路面コンディションの悪さが災いし、集団の中で2度の大きな落車が発生。残り30kmを過ぎたあたりで雷まで鳴り始め、レースは一時中断に。運営の誘導によって走行順が記録され、小休止が設けられた。

誰もが疲労を隠せない中、美甘く



上) インターハイのロードレース部門にて集団スプリントを制し、先頭でゴールを通過した直後の様子。当日の天気や沖繩独特の滑りやすい路面を考慮し、空気圧を通常より低めに設定するなど、勝利に向けた万全の体制でレースに挑んだ撮影: 菅洋介さん

左) インターハイ以降は王者の重圧を背負うも、慢心することなく自己研鑽に励み、複数の大会で上位入賞を果たしている



上) 昨年11月の中国地域自転車競技選手権ロードレース大会でのゴールシーン。一般の部で出場した美甘くん(写真中央)は、同郷の先輩で指導者でもある金田聡士選手(同左)たちとトレインを組み、鳥取勢でワンツーフィニッシュを決めた

王者に慢心なし さらなる強さを求めて

イバルたちが迫っていたが、最後まで先行を許さなかった。ゴールラインを割る瞬間、自然と両手が天に伸びた。競技を始めてわずか1年半でインターハイ優勝。物語のような結末が、一人のスポーツ少年のもとに舞い降りた。

インターハイ覇者の名を冠した後、美甘くんは驕りはなかった。同部顧問の鈴木遊先生が「集中力や技術の高さだけでなく、謙虚な姿勢や周囲への感謝の気持ちを忘れないところが美甘くんの強さ」と評するよう、現状に満足することなく、支えてくれる周囲に感謝しながら、王者のプレッシャーを向上心に換えて自己研鑽を重ねた。

新型コロナウイルス感染症の影響